

# 児童虐待における幼児・小学生の現状と保育士・ 教員養成に求められるもの —全国児童相談所児童虐待調査の結果から—

片倉 昭子（子ども心理学科・教授）

加藤 吉和（子ども心理学科・教授）

## I はじめに

筆者らは、「全国児童相談所長会」からの依頼を受け、平成20年4月から全国児童相談所の「児童虐待に対する家族支援の取り組み状況」について調査を行ってきた。平成21年6月に、その結果を「全国児童相談所における家族支援の取り組み状況調査 報告書」として報告した。また、これに先立ち、「財団法人子ども未来財団」からの調査研究等事業費により同様の調査を実施し、平成21年3月に「児童虐待相談のケース分析等に関する調査研究 結果報告書」を子ども未来財団に提出した。

全国児童相談所では、「児童虐待の実態調査」を平成8年に実施している。しかし、それから12年経ち、その間、児童虐待の大幅な増加は重大な社会問題として認識されるようになった。また、厚生労働省は、児童相談所や関係機関に“親指導と児童の心に対するケア”を強く求めるとともに、“家族再統合”にも積極的に取り組むよう促している。

これを受け、今回の第三回調査<sup>1)</sup>（以下、調査）では、前調査で使用した調査票に大幅な変更（調査項目数と調査内容）を加えて新たな調査票を作成し、それを全国197の児童相談所に送付して195所から回答を得た（回収率99.0%）。このように、今回の調査は現時点での「全国児童相談所に於ける児童虐待への取り組み状況」を多面的かつ包括的に分析したものである。全国児童相談所長会が12年ぶりに実施した悉皆調査／全数調査の結果であることから、ここから得られた知見は新聞や放送などのマスコミにも多く取り上げられ、児童相談所や関係機関のみならず社会が児童虐待に対する認識を深めることに寄与したものと考えられる。

本論では、この調査結果の一部を報告しながら、特に「低年齢から小学校年齢の被虐待児童の状況」に焦点を当てて考察する。その理由は、鎌倉女子大学（以下、本学）に在学する学生の多くが、保育園を中心とした「児童福祉施設」や、「幼稚園」および「小学校」という低年齢児童を対象とした教育機関での就労を志望していることにある。従って、本論が学生への児童虐待に関する教育の一助になるものと考えられる。

なお、本論での調査データの使用・掲載については、「全国児童相談所長会」と「財団法人子ども未来財団」より許可を得ている。

## II 目的と方法

調査結果より、全国の児童相談所が扱った「被虐待幼児と被虐待小学年齢児童の状況」等を報告する。加えて、本学の学生にとって「児童虐待の知識」が必須となっている事実を明らかにする。そのため、調査結果から低年齢被虐待児童のデータを抽出・整理し、それらを図表によって示しながら、適宜考察を加えていく。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 全児相の被虐待児童数と各ブロック毎の被虐待児童数

全国195児相（以下、全児相）に於いて、「被虐待相談として受理した児童数」は98,95人、このうち「被虐待に該当した児童数（以下、被虐待児童数）」は8,108人であった。これを年間換算数にすると32,432人<sup>2)</sup>となる。被虐待児童数とその割合を地域毎（各ブロック毎）にみたものが表1、それをグラフで示したものが図1である。

表1 全児相の被虐待児童数と各ブロック毎の被虐待児童数

|       | サンプル<br>数 | 北海道<br>ブロック | 東北ブ<br>ロック | 関東甲信<br>越ブロック | 中部ブ<br>ロック | 近畿ブロッ<br>ク | 中国ブロッ<br>ク | 四国ブロッ<br>ク | 九州ブロッ<br>ク |
|-------|-----------|-------------|------------|---------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 合計(人) | 8108      | 346         | 450        | 3349          | 810        | 1505       | 621        | 389        | 638        |
| (%)   | 100       | 4.3         | 5.6        | 41.3          | 10.0       | 18.6       | 7.7        | 4.8        | 7.9        |

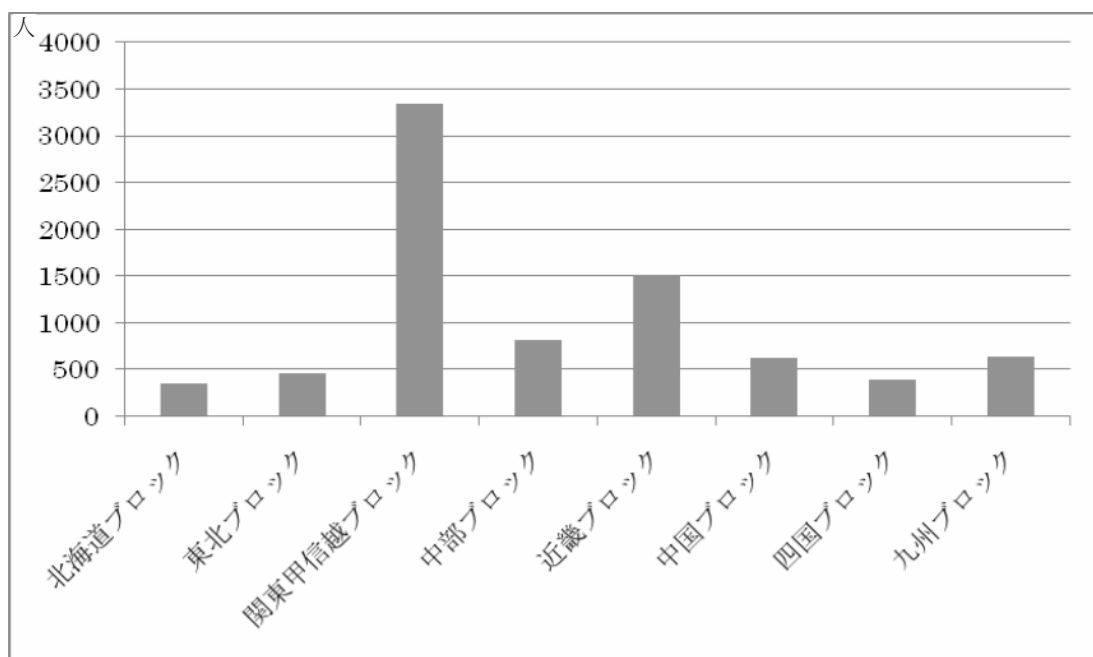


図1 全児相の被虐待児童数と各ブロック毎の被虐待児童数

各ブロック毎にその割合をみると、「関東甲信越ブロック」が3,349人で、これは全体の41.3%を占める。ただ、各ブロック毎の児童人口に違いがあるので、この結果から、「関東甲信越ブロック」が全国で最も児童虐待の発生する割合の高い地域と結論することはできない。そこで、「ブロック別児童人口1万人比年間被虐待児童数」を調査結果からみると、「全国15.4人」（平成8年調査の約9倍<sup>3)</sup>）、「北海道ブロック15.8人」、「東北ブロック11.3人」、「関東甲信越ブロック18.2人」、「中部ブロック10.4人」、「近畿ブロック17.9人」、「中部ブロック19.2人」、「四国ブロック24.1人」、「九州ブロック9.8人」で、「関東甲信越ブロック」は「四国ブロック」、「中部ブロック」に次いで三番目となっている。この結果を図2でグラフにして示した。

各ブロック間での被虐待児童への取り組み状況（被虐待児童の発見や取り組み、対応機関の連携等）が異なるので、各ブロック間の「児童人口1万人比年間被虐待児童数」の多寡をもって、児童虐待が発生しやすい地域と断じることはいできない。ただ、被虐待児童数だけで言えば、大都市が集中する「関東甲信越ブロック」は、児童相談所が扱う児童虐待の件数が全国でも飛びぬけて多い地域であることがわかる。

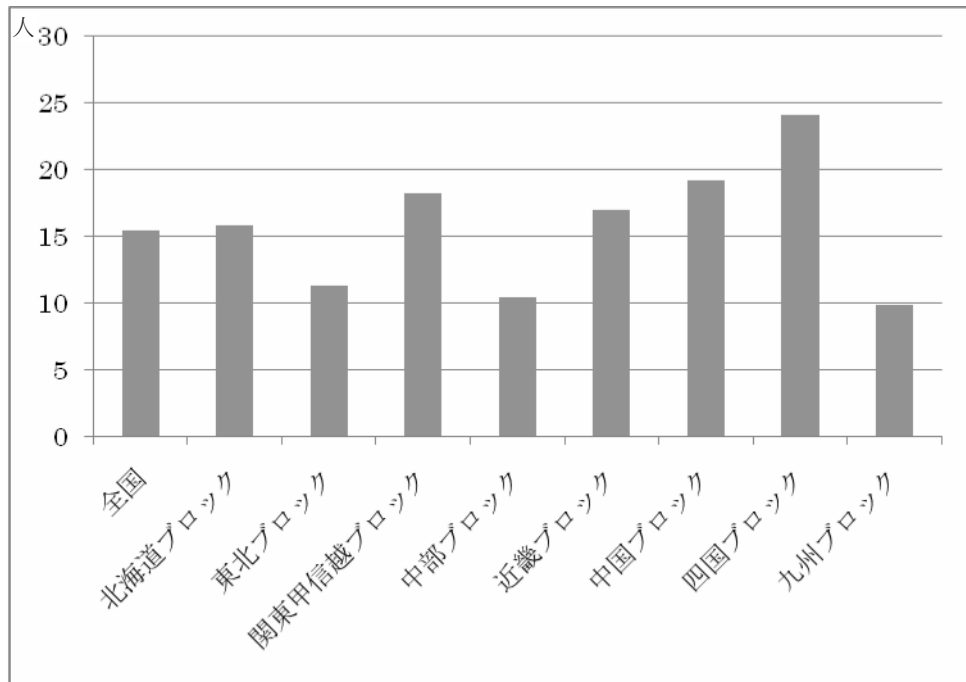


図2 ブロック別児童人口1万人比年間被虐待児童数

本学に在学する学生の大多数は、神奈川県またはその近隣地域に在住しているだけでなく、「保育園、その他の児童福祉施設」、「幼稚園教諭」、「小学校教諭」などの児童を対象にする専門職に多く就く。この事実以上に結果を加味して考えると、「本学の学生たちは、全国で最も児童虐待数が多い地域で就労する」ことになり、業務上、何らかの形で児童虐待に関わる可能性が高いことを示唆していると言えよう。

## 2. 被虐待児童の虐待種別と在学状況等

被虐待児童について、「虐待種別と在学状況等」をみたものが表2である。図3は、「在学状況等における被虐待児童数」をグラフで示したものである。表2より、被虐待児童全体の76.7%が小学校までの年齢層に集まっていて、特に小学校に在学中の児童に38.1%と被虐待児童数が多いことがわかる。本学の学生が、業務上、何らかの形で児童虐待に関わる可能性については既述したが、被虐待児童の8割近くが乳児から小学生年齢に集中していることは、その可能性が更に高くなるものとして捉える必要がある。

表2 被虐待児童の虐待種別と在学状況等

|         | サンプル<br>数 | 家庭に<br>いる乳幼児 | 保育所その他<br>の保育施設 | 幼稚園 | 小学校  | 中学校  | 高校   | その他 | 不明  | 無回答 |
|---------|-----------|--------------|-----------------|-----|------|------|------|-----|-----|-----|
| 合計(人)   | 8108      | 1335         | 1458            | 336 | 3093 | 1213 | 383  | 163 | 66  | 61  |
| (%)     |           | 16.5         | 18.0            | 4.1 | 38.1 | 15.0 | 4.7  | 2.0 | 0.8 | 0.8 |
| 《虐待の種別》 |           |              |                 |     |      |      |      |     |     |     |
| 身体的虐待   | 3207      | 378          | 629             | 140 | 1306 | 498  | 178  | 53  | 7   | 18  |
|         |           | 11.8         | 19.6            | 4.4 | 40.7 | 15.5 | 5.6  | 1.7 | 0.2 | 0.6 |
| ネグレクト   | 3162      | 653          | 583             | 68  | 1210 | 448  | 80   | 81  | 12  | 27  |
|         |           | 20.7         | 18.4            | 2.2 | 38.3 | 14.2 | 2.5  | 2.6 | 0.4 | 0.9 |
| 性的虐待    | 293       | 13           | 27              | 7   | 74   | 106  | 45   | 16  | 4   | 1   |
|         |           | 4.4          | 9.2             | 2.4 | 25.8 | 36.2 | 15.4 | 5.5 | 1.4 | 0.3 |
| 心理的虐待   | 2410      | 287          | 394             | 145 | 974  | 407  | 149  | 33  | 12  | 9   |
|         |           | 11.9         | 16.3            | 6.0 | 40.4 | 16.9 | 6.2  | 1.4 | 0.5 | 0.4 |

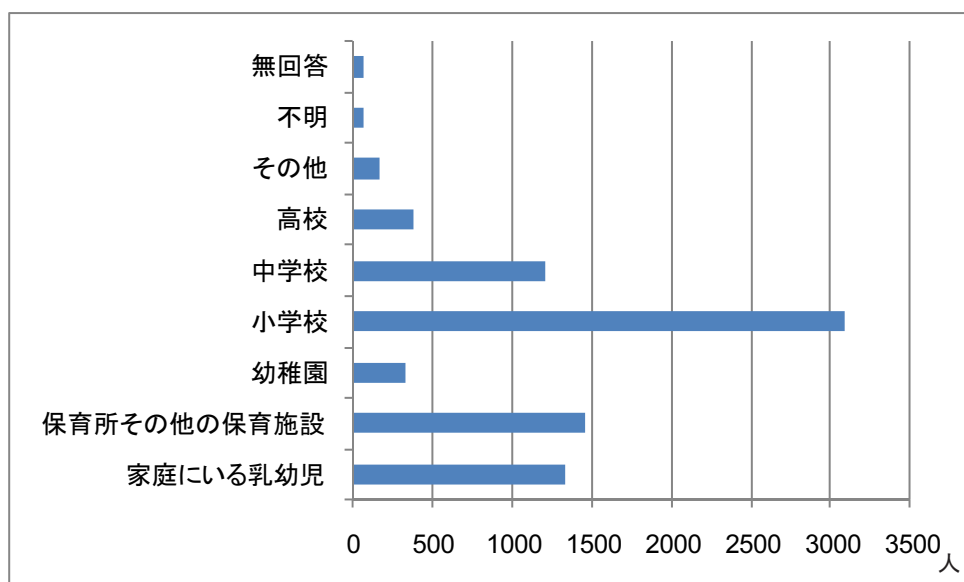


図3 在学状況等における被虐待児童数

### 3. 被虐待児童の年齢と虐待の重症度

低年齢児ほど心身の発達は脆弱であり、その健やかな発達を保証するものとして「養育者からの適切な養育」が必要となる。従って、児童虐待に於いては、被虐待児童の年齢が低いほど虐待による心身の影響が甚大になることが危惧される。このことは調査結果からも支持されているが、筆者らも長年の実践に於いて、「低年齢被虐待児童の虐待は重度化する傾向がある」との事実を確認している。また、乳幼児が受ける身体的虐待やネグレクトは死につながることも珍しくない。社会保障審議会児童部会の統計（2009）では“約3



日に1人の児童が児童虐待（心中を含む）により命を落とし、死亡した子どもの年齢をみると、0歳児が5割弱であり、特に1ヶ月未満に集中<sup>\*)4)</sup>している。

表3は、被虐待児の年齢と虐待の重症度をみたものである。「重症度」で年齢分布をみると、「生命の危機あり」では0歳が52人（40.3%）と群を抜いて高い。次に1歳児13人（10.1%）、2歳児10人（7.8%）となっており、0歳児の割合の大きさが際立っている。「0～5歳」では95人（73.6%）と、4人に3人が乳幼児に集中している。

「生命の危機あり」と「重度虐待」の「重度虐待以上」597人では、「0～5歳」の乳幼児が282人（47.2%）、「6～11歳（概ね小学生）」が167人（28.0%）、「12～14歳（概ね中学生）」94人（15.7%）、「15歳以上」54人（9.0%）となり、年齢が低いほど重度虐待の割合が高い。「0～5歳」では、全体の8,108人に対する割合39.0%（3,161人）と比較しても、その高さは明らかである。

表3 被虐待児の年齢と虐待の重症度

|          | サンプル数 | 0歳   | 1歳   | 2歳  | 3歳  | 4歳  | 5歳  | 6歳   | 7歳  | 8歳  | 9歳  | 10歳 | 11歳 | 12歳 | 13歳 | 14歳 | 15歳 | 16歳 | 17歳 | 18歳 | 19歳 | 無回答 |
|----------|-------|------|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 合計(人)    | 8108  | 476  | 435  | 531 | 589 | 598 | 532 | 588  | 579 | 526 | 549 | 472 | 413 | 385 | 453 | 387 | 243 | 176 | 129 | 3   | 3   | 41  |
| (%)      |       | 5.9  | 5.4  | 6.5 | 7.3 | 7.4 | 6.6 | 7.3  | 7.1 | 6.5 | 6.8 | 5.8 | 5.1 | 4.7 | 5.6 | 4.8 | 3.0 | 2.2 | 1.6 | 0.0 | 0.0 | 0.5 |
| <虐待の重症度> |       |      |      |     |     |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
| 生命の危機あり  | 129   | 52   | 13   | 10  | 6   | 8   | 6   | 5    | 5   | 2   | 6   | 1   |     | 2   | 4   | 5   | 2   | 1   | 1   |     |     |     |
|          |       | 40.3 | 10.1 | 7.8 | 4.7 | 6.2 | 4.7 | 3.9  | 3.9 | 1.6 | 4.7 | 0.8 |     | 1.6 | 3.1 | 3.9 | 1.6 | 0.8 | 0.8 |     |     |     |
| 重度虐待     | 468   | 62   | 22   | 25  | 26  | 29  | 23  | 29   | 24  | 26  | 33  | 18  | 18  | 18  | 36  | 29  | 24  | 17  | 9   |     |     |     |
|          |       | 13.2 | 4.7  | 5.3 | 5.6 | 6.2 | 4.9 | 6.2  | 5.1 | 5.6 | 7.1 | 3.8 | 3.8 | 3.8 | 7.7 | 6.2 | 5.1 | 3.6 | 1.9 |     |     |     |
| 中度虐待     | 2078  | 94   | 90   | 120 | 123 | 145 | 122 | 140  | 170 | 145 | 159 | 137 | 133 | 106 | 135 | 111 | 61  | 53  | 31  |     | 1   | 2   |
|          |       | 4.5  | 4.3  | 5.8 | 5.9 | 7.0 | 5.9 | 6.7  | 8.2 | 7.0 | 7.7 | 6.6 | 6.4 | 5.1 | 6.5 | 5.3 | 2.9 | 2.6 | 1.5 |     | 0.0 | 0.1 |
| 軽度虐待     | 2954  | 102  | 138  | 194 | 226 | 228 | 196 | 227  | 215 | 211 | 213 | 178 | 159 | 155 | 161 | 145 | 98  | 54  | 45  | 1   | 2   | 6   |
|          |       | 3.5  | 4.7  | 6.6 | 7.7 | 7.7 | 6.6 | 7.7  | 7.3 | 7.1 | 7.2 | 6.0 | 5.4 | 5.2 | 5.5 | 4.9 | 3.3 | 1.8 | 1.5 | 0.0 | 0.1 | 0.2 |
| 虐待の危機あり  | 1339  | 90   | 95   | 101 | 105 | 111 | 110 | 99   | 95  | 77  | 81  | 70  | 52  | 63  | 54  | 53  | 31  | 24  | 21  | 1   |     | 6   |
|          |       | 6.7  | 7.1  | 7.5 | 7.8 | 8.3 | 8.2 | 7.4  | 7.1 | 5.8 | 6.0 | 5.2 | 3.9 | 4.7 | 4.0 | 4.0 | 2.3 | 1.8 | 1.6 | 0.1 |     | 0.4 |
| 不明       | 328   | 17   | 25   | 25  | 31  | 29  | 19  | 34   | 19  | 9   | 12  | 18  | 10  | 11  | 13  | 18  | 11  | 9   | 10  | 1   |     | 7   |
|          |       | 5.2  | 7.6  | 7.6 | 9.5 | 8.8 | 5.8 | 10.4 | 5.8 | 2.7 | 3.7 | 5.5 | 3.0 | 3.4 | 4.0 | 5.5 | 3.4 | 2.7 | 3.0 | 0.3 |     | 2.1 |

※「重症度」サンプル数8,108人（有効回答6,968人、無効回答1,140人）

このように、調査の結果からも、「低年齢被虐待児童の虐待は重度化する」という事実が明らかとなった。このことは、本学の学生が扱う可能性のある被虐待児童は、その数の多さだけにとどまらず、重度以上の虐待を受けている可能性を秘めていることを示唆していると考えられる。

#### 4. 虐待が児童の心身等に及ぼす影響

被虐待児童は心身にどのような影響を被っているのでしょうか。被虐待児童は、「身体発達の遅れ」、「知的発達の遅れ」を伴うこともあるが、生後5歳未満までに親または養育者と愛着関係が持てない場合には、重篤な「愛着障害」を示す”と言われていいる。「愛着障害」は、人格形成の基盤に於いて、適切な人間関係を構築する能力の障害である。この障害は、他者との安定した関係を持つことができずに他者に対して無関心を示す「抑制型」と、部分的な愛着関係に止まり他者に対して無差別的に薄い愛着を示す「脱抑制型」に分類できる。愛着障害は、将来にわたって適応的な対人関係の形成に深刻なダメージを与えるものである。虐待が重度化すればするほど、その影響は甚大であろうと思われる。杉山(2007)は、“抑制型”は「自閉症圏の発達障害」に、“脱抑制型”は「注意欠陥多動性障害」に類似している”と指摘し、“被虐待児童の被る心身の障害は「第四の発達障害」と考えられる”と述べている。

精神医学では、被虐待児童が示す問題行動の原因を“心的外傷後ストレス障害(PTSD <Post Traumatic Stress Disorder>)”によとし、“複雑性 PTSD”や“極度のストレスによる特定不能の障害(DESNOS <Disorders of Extreme Stress Not Otherwise Specified>)”の症状としても診断分類する。児童虐待が人の心身に与える影響は、児童期から青年期や成人期にまで広がり、“行為障害”、“反抗挑戦性障害”、“不安障害”、“感情障害”、“パニック障害”、“性機能障害”、“解離性人格障害”、“反社会性人格障害”等の精神医学上の疾患を生じさせる可能性を持つ。また、彼らが親になった時に、自分の子どもを虐待することも多く(100%ではなく、可能性が高まるという意味)、これは“虐待の連鎖”と言われている。

これらを考えると、児童虐待の深刻さや、それがもたらす「発達上のリスク」や「精神保健上の問題」等を学生にしっかりと認識させる必要がある。そのためには、児童虐待に関する「社会福祉学と心理学の基礎知識」に加えて、「精神医学上の疾病分類やその内容」についても教授していく必要があるだろう。

では、実際に被虐待児童はどのような心身等の問題を呈しているのだろうか。これを調査結果のデータから示す。表4は、虐待の重症度別に被虐待児童の心身等の状況をみたものである。「不明、その他、無回答」の1,950人(24.1%)を除く7,175人(78.6%)のうち、「特になし」は3,343人(46.6%)、「何らかの心身等の問題を示している被虐待児童」は3,832人(53.4%)であった。この結果より、約35%の被虐待児童に「心身等の問題」が生じていることが明らかとなった。「不明、その他、無回答」1,950人の被虐待児童についても、調査の回答後に問題が明らかとなる可能性を加味すれば、この人数は更に増えることが予想される。

今回の調査でも、被虐待児童の多くは心身等に様々な影響を受けていることがわかった。そこで、以下では心身等の状況の内容について述べていく。

##### (1) 知的発達と身体発達の遅れについて

「知的発達の遅れ」と「身体発達の遅れ」を合計すると628人(7.7%)であるが、この中には元々障害児であった児童も含まれていることが考えられるので(調査では、障害児は虐待を受けやすいことがわかっている)、この数字だけをもって被虐待児に「知的発達の遅れ」や「身体発達の遅れ」が8%程度生じているとは断言できない。しかし、「重度

虐待以上」ではその割合が高くなっていることを考えれば、激しい虐待が児童の知的発達や心身の発達に遅滞をもたらす可能性は指摘できるだろう。

(2) 知的発達と身体発達の遅れ以外について

「特になし、不明、その他」を除く心身等の状況について、割合が高いものを上位から順に三位まで並べると、「不安、怯え」1,033人(12.7%)、「非社会的問題行動」578人(7.1%)、「反社会的な問題行動」142人(5.5%)となる。「特になし」を重症度で見ると、「軽度虐待以下」ではその割合が高くなっている。

このように、被虐待児童は特に「不安や怯え」、「非社会的問題行動」、「反社会的行動」を多く示す。これらの状態が、被虐待児童の「うつ状態、無感動や無反応」、「食行動上の問題」、「性的問題行動」、「日常生活に支障をきたすような精神症状や問題行動」という多様な問題行動に繋がってくるのであろう。

表4 重症度と被虐待児童の心身等の状況

|           | サンプル数      | 知的発達の遅れ     | 身体発達の遅れ    | 不安、怯え        | うつ状態      | 無感動や無反応    | 強い攻撃性      | 習癖異常      | 食行動上の問題(むちゃ食い、拒食など) | 非社会的問題行動(不登校・かみ黙など) | 反社会的な問題行動(非行など) | 性的問題行動(異性への極端な嫌悪感を含む) | その他日常生活に支障をきたすような精神症状、問題行動等 | 特になし         | 不明          | その他        | 無回答         |
|-----------|------------|-------------|------------|--------------|-----------|------------|------------|-----------|---------------------|---------------------|-----------------|-----------------------|-----------------------------|--------------|-------------|------------|-------------|
| 合計        | (人)<br>(%) | 8108<br>5.2 | 420<br>2.6 | 1033<br>12.7 | 65<br>0.8 | 181<br>2.2 | 329<br>4.1 | 55<br>0.7 | 131<br>1.6          | 578<br>7.1          | 447<br>5.5      | 142<br>1.8            | 243<br>3.0                  | 3343<br>41.2 | 848<br>10.5 | 138<br>1.7 | 964<br>11.9 |
| 《虐待の重症度別》 |            |             |            |              |           |            |            |           |                     |                     |                 |                       |                             |              |             |            |             |
| 生命の危機あり   | 129        | 15<br>11.6  | 14<br>10.9 | 25<br>19.4   | -         | 5<br>3.9   | 3<br>2.3   | 2<br>1.6  | 1<br>0.8            | 5<br>3.9            | 3<br>2.3        | 2<br>1.6              | 3<br>2.3                    | 46<br>35.7   | 12<br>9.3   | 3<br>2.3   | 11<br>8.5   |
| 重度虐待      | 468        | 42<br>9.0   | 33<br>7.1  | 121<br>25.9  | 11<br>2.4 | 21<br>4.5  | 34<br>7.3  | 9<br>1.9  | 16<br>3.4           | 46<br>9.8           | 32<br>6.8       | 21<br>4.5             | 32<br>6.8                   | 145<br>31.0  | 29<br>6.2   | 7<br>1.5   | 33<br>7.1   |
| 中度虐待      | 2078       | 149<br>7.2  | 82<br>3.9  | 405<br>19.5  | 32<br>1.5 | 100<br>4.8 | 157<br>7.6 | 23<br>1.1 | 58<br>2.8           | 236<br>11.4         | 182<br>8.8      | 52<br>2.5             | 104<br>5.0                  | 731<br>35.2  | 152<br>7.3  | 31<br>1.5  | 79<br>3.8   |
| 軽度虐待      | 2954       | 136<br>4.6  | 48<br>1.6  | 358<br>12.1  | 11<br>0.4 | 43<br>1.5  | 103<br>3.5 | 15<br>0.5 | 37<br>1.3           | 221<br>7.5          | 177<br>6.0      | 43<br>1.5             | 80<br>2.7                   | 1420<br>48.1 | 289<br>9.8  | 58<br>2.0  | 171<br>5.8  |
| 虐待の危機あり   | 1339       | 59<br>4.4   | 25<br>1.9  | 98<br>7.3    | 7<br>0.5  | 10<br>0.7  | 23<br>1.7  | 5<br>0.4  | 11<br>0.8           | 51<br>3.8           | 34<br>2.5       | 19<br>1.4             | 14<br>1.0                   | 765<br>57.1  | 189<br>14.1 | 17<br>1.3  | 74<br>5.5   |
| 不明        | 328        | 13<br>4.0   | 3<br>0.9   | 14<br>4.3    | 2<br>0.6  | 1<br>0.3   | 4<br>1.2   | -         | 5<br>1.5            | 5<br>1.5            | 9<br>2.7        | 4<br>1.2              | 6<br>1.8                    | 122<br>37.2  | 87<br>26.5  | 15<br>4.6  | 48<br>14.6  |

※「心身等の状況」サンプル数8,108人、被虐待児童数9,125人（有効回答7,313人、無効回答1,812人）。

※「重症度」サンプル数8,108人、被虐待児童数8,108人（有効回答6,968人、無効回答1,140人）

内訳は、「心身等の状況」数（複数回答）に対応した「重症度」数となる。

図4は、表3をグラフにして示したものである。

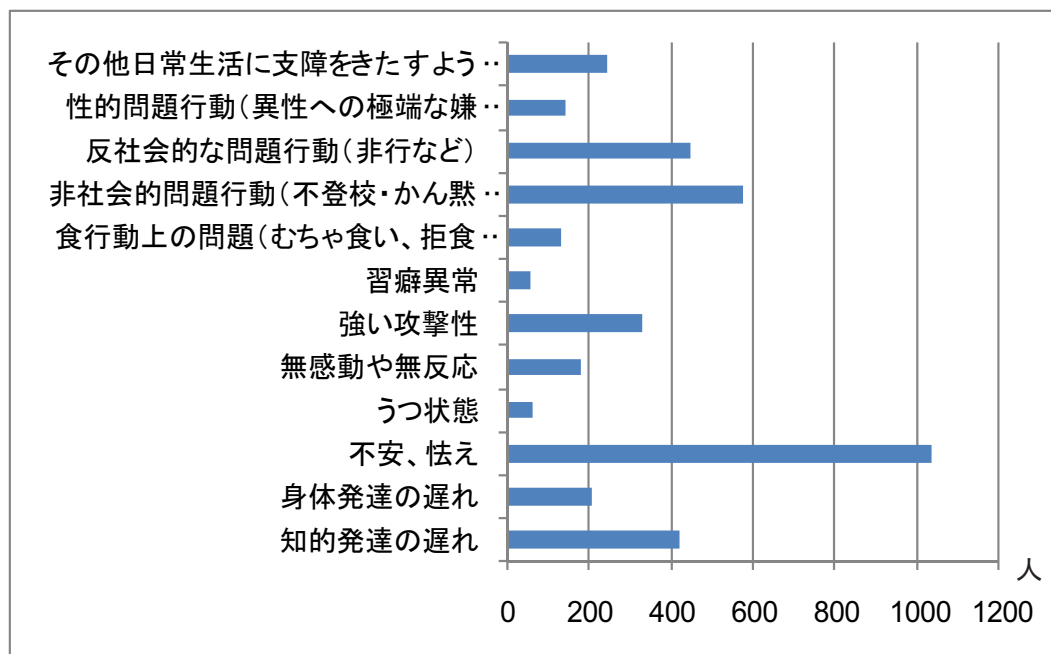


図4 被虐待児童の心身等の状況

これの結果を簡約すれば、被虐待児童は「知的発達や身体発達の遅れ」を可能性として持ち、「不安や怯え」、「非社会的行動」それに「反社会的行動」をその基盤にしながら、多様な問題行動を呈している。従って、被虐待児童への適切な対応には、その状態像に対する専門的な知識と対応技術を必要とする。この点については、筆者らは長年の実体験からも首肯できる。本学の学生たちは将来、その職務上、被虐待児童の示す複雑な問題行動の持つ意味と、それへの対応技術も求められるようになるであろう。

## 5. 児童虐待の発見と対応

### (1) 法律による虐待の通告の義務について

以上では、調査結果から、被虐待児童の状況について述べてきた。そして、乳幼児に関わる保育士として、また幼稚園児や小学性に関わる教員として、学生たちが児童虐待に関する知識と対応力が必要となる立場に就く事実を、調査の結果をもとに考察した。しかし、児童虐待への対応にはこれだけでは不十分である。

表5により、児童虐待の防止等に関する法律第5条と第6条を見てみよう。この二つの条文は、「児童虐待の早期発見等」と「児童虐待に係る通告」を規定したものである。第5条の1号によれば、「学校、児童福祉施設…の教職員、児童福祉施設の職員…その他児童の福祉に職務上関係のある者は、児童虐待を発見しやすい立場にあることを自覚の必要があり」加えて「児童虐待の早期発見に努めなければならない」のである。また3号では、「学校やび児童福祉施設は、児童と保護者に対して、児童虐待の防止のための教育や啓発に努めなければならない」とする。

第6条の1項では、「児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者は、速やかに、市町村、都道府県の設置する福祉事務所もしくは児童相談所」に通告することを規定し、2、3項ではそれを具体的に定めている。ここでは、1項に於いて、「通告しなければならない」とあることに注意したい。つまり、この条文は「義務規定」として書かれている。「児童虐待を発見しやすい立場にある者は、児童虐待を発見した場合はそれを通告しなければならない」のである。通告しなかった場合の罰則規定はないものの、通告は発見者の義務と解釈するのが相当である。通告の重要性は、通告義務が刑法の「秘密漏示罪の規定その他の守秘義務」よりも優先されていることから明らかである。

表5 児童虐待防止等に関する法律（抜粋）

（児童虐待の早期発見等）

第五条 学校、児童福祉施設、病院その他児童の福祉に業務上関係のある団体及び学校の教職員、児童福祉施設の職員、医師、保健師、弁護士その他児童の福祉に職務上関係のある者は、児童虐待を発見しやすい立場にあることを自覚し、児童虐待の早期発見に努めなければならない。

2 前項に規定する者は、児童虐待の予防その他の児童虐待の防止並びに児童虐待を受けた児童の保護及び自立の支援に関する国及び地方公共団体の施策に協力するよう努めなければならない。

3 学校及び児童福祉施設は、児童及び保護者に対して、児童虐待の防止のための教育又は啓発に努めなければならない。

（児童虐待に係る通告）

第六条 児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者は、速やかに、これを市町村、都道府県の設置する福祉事務所若しくは児童相談所又は児童委員を介して市町村、都道府県の設置する福祉事務所若しくは児童相談所に通告しなければならない。

2 前項の規定による通告は、児童福祉法（昭和二十二年法律第百六十四号）第二十五条の規定による通告とみなして、同法の規定を適用する。

3 刑法（明治四十年法律第四十五号）の秘密漏示罪の規定その他の守秘義務に関する法律の規定は、第一項の規定による通告をする義務の遵守を妨げるものと解釈してはならない。

## （2）第一発見者について

それでは、今回の調査結果では、児童虐待の発見や通告の状況はどうなっているだろうか。どこの機関が児童虐待を発見し、通告しているのだろうか。

被虐待児童8,108人について第一発見者がどの機関だったのかを見ていくことにする。

今回の調査結果では、小学校、中学校、高校というようには分類されておらず、学校として一項目になって表にまとめられているので、ここでは保育園、幼稚園、学校の項目に焦点を当てて、みていくことにする。

表6 第一発見者数（重症度別）

|           | サ<br>ン<br>プ<br>ル<br>数 | 児童<br>委員・主任<br>児童委員 | 市区<br>町村  | 都道府<br>県   | 警察          | 保育所        | 幼稚園       | 児童館       | 放課後<br>児童ク<br>ラブ | その他<br>の児童<br>福祉施<br>設 | 里親       | 学校           | 学習塾<br>等その<br>他の教<br>育機関 | 虐待者<br>本人  | その他<br>の家族<br>親族 | 近隣知<br>人     | 児童本<br>人   | 家庭裁<br>判所 | 医療機<br>関   | NPO等<br>民間団<br>体が開<br>設する<br>電話相<br>談等 | その他        | 不明        | 無回答       |
|-----------|-----------------------|---------------------|-----------|------------|-------------|------------|-----------|-----------|------------------|------------------------|----------|--------------|--------------------------|------------|------------------|--------------|------------|-----------|------------|--|------------|-----------|-----------|
| 合計        | (人)<br>(%)            | 8108<br>1.1         | 92<br>9.5 | 767<br>4.3 | 877<br>10.8 | 465<br>5.7 | 44<br>0.5 | 17<br>0.2 | 27<br>0.3        | 69<br>0.9              | 4<br>0.0 | 1353<br>16.7 | 14<br>0.2                | 439<br>5.4 | 1228<br>15.1     | 1462<br>18.0 | 165<br>2.0 | 7<br>0.1  | 408<br>5.0 | 14<br>0.2                              | 185<br>2.3 | 39<br>0.5 | 87<br>1.1 |
| (虐待の重症度別) |                       |                     |           |            |             |            |           |           |                  |                        |          |              |                          |            |                  |              |            |           |            |  |            |           |           |
| 生命の危機あり   | 129                   | -                   | 9         | 1          | 14          | 6          | -         | -         | -                | 1                      | -        | 6            | 1                        | 5          | 24               | 7            | -          | -         | 44         | -                                      | 8          | 1         | 2         |
|           |                       | -                   | 7.0       | 0.8        | 10.9        | 4.7        | -         | -         | -                | 0.8                    | -        | 4.7          | 0.8                      | 3.9        | 18.6             | 5.4          | -          | -         | 34.1       | -                                      | 6.2        | 0.8       | 1.6       |
| 重度虐待      | 468                   | 1                   | 42        | 27         | 32          | 39         | 3         | 3         | 2                | 5                      | -        | 102          | -                        | 15         | 58               | 40           | 23         | -         | 64         | -                                      | 6          | 2         | 4         |
|           |                       | 0.2                 | 9.0       | 5.8        | 6.8         | 8.3        | 0.6       | 0.6       | 0.4              | 1.1                    | -        | 21.8         | -                        | 3.2        | 12.4             | 8.5          | 4.9        | -         | 13.7       | -                                      | 1.3        | 0.4       | 0.9       |
| 中度虐待      | 2078                  | 25                  | 220       | 85         | 193         | 142        | 14        | 1         | 6                | 25                     | 2        | 464          | 2                        | 134        | 318              | 232          | 52         | -         | 103        | 4                                      | 45         | 7         | 4         |
|           |                       | 1.2                 | 10.6      | 4.1        | 9.3         | 6.8        | 0.7       | 0.0       | 0.3              | 1.2                    | 0.1      | 22.3         | 0.1                      | 6.4        | 15.3             | 11.2         | 2.5        | -         | 5.0        | 0.2                                    | 2.2        | 0.3       | 0.2       |
| 軽度虐待      | 2954                  | 34                  | 312       | 116        | 339         | 171        | 16        | 13        | 13               | 14                     | 1        | 506          | 8                        | 169        | 430              | 546          | 62         | 2         | 105        | 8                                      | 67         | 10        | 12        |
|           |                       | 1.2                 | 10.6      | 3.9        | 11.5        | 5.8        | 0.5       | 0.4       | 0.4              | 0.5                    | 0.0      | 17.1         | 0.3                      | 5.7        | 14.6             | 18.5         | 2.1        | 0.1       | 3.6        | 0.3                                    | 2.3        | 0.3       | 0.4       |
| 虐待の危機あり   | 1339                  | 17                  | 98        | 63         | 175         | 55         | 8         | -         | 4                | 21                     | 1        | 134          | 3                        | 75         | 261              | 323          | 8          | 4         | 42         | 2                                      | 30         | 2         | 13        |
|           |                       | 1.3                 | 7.3       | 4.7        | 13.1        | 4.1        | 0.6       | -         | 0.3              | 1.6                    | 0.1      | 10.0         | 0.2                      | 5.6        | 19.5             | 24.1         | 0.6        | 0.3       | 3.1        | 0.1                                    | 2.2        | 0.1       | 1.0       |
| 不明        | 328                   | 5                   | 21        | 15         | 43          | 14         | -         | -         | -                | 3                      | -        | 38           | -                        | 6          | 45               | 88           | 10         | -         | 8          | -                                      | 15         | 2         | 15        |
|           |                       | 1.5                 | 6.4       | 4.6        | 13.1        | 4.3        | -         | -         | -                | 0.9                    | -        | 11.6         | -                        | 1.8        | 13.7             | 26.8         | 3.0        | -         | 2.4        | -                                      | 4.6        | 0.6       | 4.6       |

※第一発見者サンプル数8,108人、相談件数8,108件（有効回答7,983件、無効回答125件）

第一発見者数は、相談数に替えて「虐待あり」の人数とした。

※重症度サンプル数8,108人、被虐待児童数8,108人（有効回答6,968人、無効回答1,140人）

表6は第一発見者の数を重症度別に示している。第一発見者は児童相談所に通告された虐待を最初に発見した機関である。

表6では保育所の通告数は465件で全体の5.7%であり、内訳は、生命の危機あり全体のうちの4.7%、重度虐待8.3%、中度虐待6.8%、軽度虐待5.8%、虐待の危機あり4.1%である。幼稚園の通告数は少なく44件で全体の0.5%であり、内訳は重度虐待全体のうちの0.6%、中度虐待0.7%、軽度虐待0.5%、虐待の危機あり4.1%である。学校の通告数は1,353件で全体の16.7%であり、内訳は生命の危機あり全体のうちの4.7%、重度虐待21.8%、中度虐待22.3%、軽度虐待17.1%、虐待の危機あり10.0%である。この重症度別の割合を図にしたのが図4である



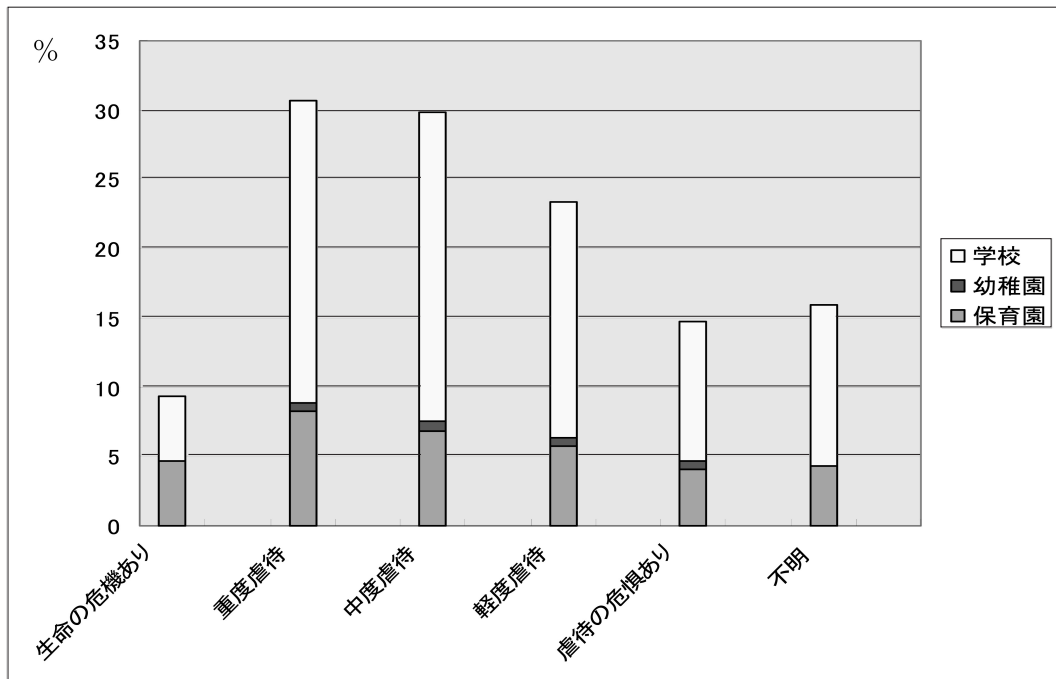


図5 保育園・幼稚園・学校の重症度別第一発見者の割合

図5でわかるように「重度虐待」、「中度虐待」では、保育園、幼稚園、学校合わせると第一発見者全体の約30%を占めていることが分かる。

学校の中で小学校がどのくらいの割合を占めているのかについて見ていくと、表2の「被虐待児の虐待種別と在学状況等」では、小学校の児童数が3,093人、中学校1,213人、高校383人で合計すると4,689人である。このうち小学校の占める割合は65.96%（約66%）である。このことから換算すると、「重度虐待」と「中度虐待」の保育園、幼稚園、小学校の占める割合は全体のおおよそ20%以上であり、「軽度虐待」と「虐待の危機あり」もそれぞれ10%以上である。第一発見者の機関が、その他を含めて20機関あるうちの3機関が、10%から20%を占めるということは虐待を発見する率が高いといえる。

### （3）通告を受理する機関について

今回の調査は児童相談所が受理した虐待の相談について報告しているが、平成16年（2004年）の児童虐待防止等に関する法律と児童福祉法の改正により、通告を受ける窓口は児童相談所と市町村における福祉事務所の児童家庭相談窓口と、双方が通告を受けることになっている。また、市町村と児童相談所の役割分担としては、児童相談所が対応の難しいケースや法的対応が必要なものを、主に担当することを目指している。つまり、虐待の重症度でいえば、子育て支援として対応できる可能性のある「虐待の危機あり」と「軽度虐待」は主に市町村、それ以上の対応の難しいケースは児童相談所ということになる。

市町村と児童相談所が、完全に役割分担ができているとしたら、保育園、幼稚園、学校は今回の調査以外にも市町村に通告していることになり、今回の調査プラス市町村への通告件数で、実際の対応件数が出てくることになるはずである。しかし、表6から重症度別の児童相談所への通告数をみると、一番多いのが「軽度虐待」、次に「中度虐待」、「虐待



の危惧あり」となっている。つまり、平成20年度現在では、「軽度虐待」、「虐待の危惧あり」の通告も、かなりの数が児童相談所にされていることになる。

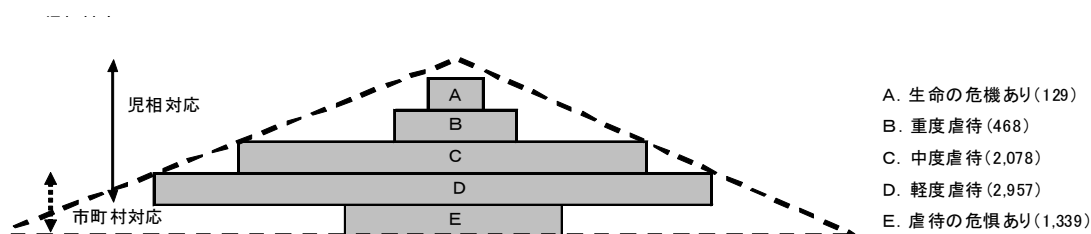
厚生労働省の「市町村の児童家庭相談業務の状況及び要保護児童対策地域協議会（子供を守る地域ネットワーク）の設置状況等について（平成21年4月現在）」によると、平成20年度に全国の市町村が受け付けた児童虐待に関する相談受付件数は51,620件である。また、同資料によると、現状では虐待事例に関して、市区町村と児童相談所の役割分担の取り決めがなされているかどうかについては、「取り決めはなく、個々の事例ごとに異なる対応になっている」が、1280か所の市町村で全体の71.2%になっている。さらに、都道府県（児童相談所等）からの市町村への後方支援として、「児童相談所等の職員による個々の事例に対する支援に必要な情報の提供や助言」86.5%、「ケース検討会への児童相談所職員の参加」89.3%となっている。

これらのことから、現在、全国的にみると市町村の虐待通告を受ける体制が完全に整っているわけではなく、児童相談所が後方支援として存在していることが分かる。そのため、市町村と児童相談所がはっきりした役割分担を実施することは少なく、同じ通告を市町村と児童相談所が、それぞれ連携してかかわっている事例がかなりあることになる。つまり、平成20年度の児童相談所の相談件数42,664件と市町村の51,620件を合わせても、重複しているため虐待相談の実数にはならないことになる。

しかし、「虐待の危惧あり」、「軽度虐待」では、保育園、幼稚園、学校から直接市町村に通告した事例もあるため、今回の調査件数以上に保育、教育現場で虐待を発見する事例が多いことは確実である。

#### （４）保育士・教員に求められる今後の課題

図6は、今回の調査報告の中で主任研究員である河津（2009）が示した、重症度別の数と発見されていない潜在的な虐待の関係を、市町村と児童相談所の役割分担を含めて図にあらわしたものである。



※ABCDEは今回の調査の数をあらわしている

図6 児童相談所と市町村の役割分担と連携

河津は“外に描いた点線はいまだ埋もれているであろう児童虐待の暗数である。今後もしかりにより数は増えることが予想される。”と述べている。

保育園、幼稚園、学校は点線内の全体にわたって、虐待発見の可能性の高い現場であるといえる。そのため、保育士、教員は児童虐待の発見とその対応のための専門的知識が求められ、資格を目指す学生も虐待に関する総合的知識の習得が不可欠になると考える。

今回の調査では、幼稚園からの通報の件数は少ないが、以上のような観点から考えてい

くと、今後、幼稚園でも子育て不安、虐待の危惧あり等の子どもと家族への支援が求められ、その対応の中から、新たな虐待の発見につながる可能性があり、幼稚園教諭にも児童虐待発見、対応の専門的知識が必要である。

## 5. まとめ

本論では、児童相談所の調査の結果から本学の学生の就職する確率の高い関東ブロックに、被虐待児童数が多く児童虐待発見の可能性が高いこと、被虐待児童の8割は乳児から小学生までに集中していること、虐待の子どもの心身に及ぼす影響が大きいこと、保育園、幼稚園、小学校が虐待を発見する確率が高いことを示し、保育士、教員に児童虐待発見のための総合的な専門的知識が必要なことを述べてきた。

一方、虐待対応では、関係機関の連携の必要性が求められている。子どもと家族にかかわった機関は、虐待を発見し通報すれば終わりになることはほとんどなく、関係機関として市町村や児童相談所及びその他の機関と連携し、子どもと家族の支援を行っていくことが求められている。つまり、保育士や教員も虐待された子どもやその家族（虐待者を含めて）に対する支援を、関係機関として役割分担をしていくことが求められていることになる。他方、虐待防止の観点から、子育て不安解消のための子育てや家族の支援について、保育園、幼稚園への期待が高くなっている。

保育士や教員が児童虐待防止のために重要な位置づけにあることを考えると、児童虐待に関する総合的な専門的知識を獲得して、現場に向かうことが求められている。

保育士や教員の養成課程において、学生は多くの課目で児童虐待について学んでいるが、その範囲は子育て不安から生命の危機に至るまで、心のケア、家族支援と多岐にわたる知識が求められる。今後、より体系的に児童虐待について学べるようにするための研究が必要と考える。

## 〈注〉

### 1) 調査者

全国児童相談所長会から調査依頼を受けた研究者4名（うち、主任研究者1名、分担研究4名）および研究協力者4名（神奈川県、千葉県、さいたま市、東京都の児相職員）。事務局は全国児童相談所長会事務局（東京都児童相談センター事業課）。

調査対象機関

全国児童相談所（197児相）。

調査方法（アンケート調査とヒアリング調査）

全国児相が、平成20年の4月から6月までの3カ月間に虐待相談として受理をしたケースについて悉皆で調査した。研究者と研究協力者が協議検討を重ねて調査項目を決め、調査用紙を作成して全国児相に送付し、195児相からの回答（回答率は99%）をデータ化した。ヒアリング調査では、各研究者が分担して、全国児相のうち12児相を選んでヒアリングを実施した。その内訳は、「宮城県中央児童相談所」、「富山県高岡児童相談所」、「大阪府中央児童相談所」、「大阪市中央児童相談所」、「京都宇治児童相談所」、「奈良県中央こども家庭相談センター」、「滋賀県中央こども家庭相談センター」、「島根県中央児童相談所」、「徳島県中央児童相談所」、「福岡県中央児童相談所」、「沖縄県中央児童相談所」。

- 2) 平成20年4月～6月の間に全国の児童相談所が対応した被虐待児童数を単純に年間数に換算した推定値。平成21年7月に厚生労働省から発表された平成20年度に全国の児童相談所で対応した児童虐待相談対応件数の速報値は42,662件である。
- 3) 児童人口の減少が指摘できるので、単純に虐待数が9倍増えたとは言えない。
- 4) “社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会の「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第5次報告）」”（平成21年7月）によれば、平成19年1月1日から平成20年3月31日までの15ヶ月間に発生又は明らかになった児童虐待による死亡事例115例142人であり、その内訳は「心中以外」の事例73例（78人）、「心中」（未遂を含む）の事例42例（64人）で、死亡した子どもの年齢では、0歳児が5割弱であり、特に1ヶ月未満に集中している。

## 文献

- 河津英彦（2009）「児童虐待相談の傾向を踏まえた児童相談所の執行体制と市町村との連携」 全国児童相談所における家庭支援への取り組み状況調査 全国児童相談所 83-85
- 才村純（2005）「子ども虐待ソーシャルワーク論」有斐閣
- 杉山登志朗（2007）「子ども虐待という第四の発達障害」学習研究社
- 藤山孝志（2008）「愛着臨床と子ども虐待」ミネルヴァ書房
- 丸山浩一・河津英彦・片倉昭子・加藤吉和・宮島清「児童虐待相談のケース分析等に関する調査研究」 財団法人こども未来財団
- 厚生労働省「市町村の児童家庭相談業務の状況及び要保護児童対策地域協議会（子供を守る地域ネットワーク）の設置状況等について（平成21年4月現在）」